

## 第1章 歴史的風致形成の背景

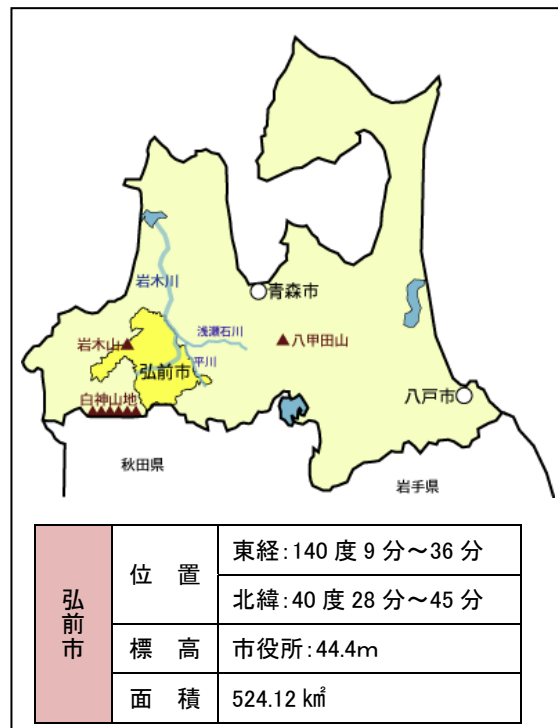
### (1) 自然及び社会的環境

#### ① 自然的環境

##### i) 自然・地形

弘前市は、青森県の南西部、津軽平野の南部に位置し、東側は奥羽山脈の八甲田連峰、西側は「津軽富士」とも呼ばれる霊峰岩木山、南側は、秋田県にまたがり世界遺産に登録されている白神山地に囲まれ、盆地状をなしています。

市内は、低地から台地、丘陵地、山地と変化に富んだ地形を示し、平野部には、白神山地に源を發し、やがては、十三湖を経て日本海に注ぐ岩木川が流れています。岩木川には、平川と浅瀬石川が合流しており、その流域の肥沃で広大な津軽平野は、県内屈指の田園地帯となっています。また、平野部周辺の丘陵地帯には、生産量日本一を誇るりんご園地が広がり、それを取り巻くように山林地帯が伸び、緑豊かな自然環境に恵まれています。



##### ii) 気候

日本海側の内陸部に位置する弘前市の気候は、夏は梅雨の影響が少なく比較的乾燥して気温が高いものの、冬は季節風の影響で西北西の風が強く、降雪量が多いという日本海側特有の気候となっています。また、三方を山に囲まれている内陸の盆地地形にあるため、気温の年較差が大きいことも特徴です。全国有数の豪雪地帯と言われている青森県にあっては、比較的温暖で恵まれた地域です。

#### ② 社会的環境

##### i) 人口

明治 22 年(1889)4 月 1 日に、全国 30 都市とともに市制を施行した当時の人口は約 31,000 人で、その後、昭和 30 年代の近隣町村との合併により、150,000 人

台となりました。平成18年(2006)2月27日、弘前市、岩木町、相馬村の合併を経て、現在は約184,000人となっています。

国勢調査によると、平成7年をピークに人口が減少傾向に転じています。65才以上の割合も年々増加しており、平成22年には25.6%にまで上昇しているなど、人口減少、少子高齢化の現象が顕著となってきています。

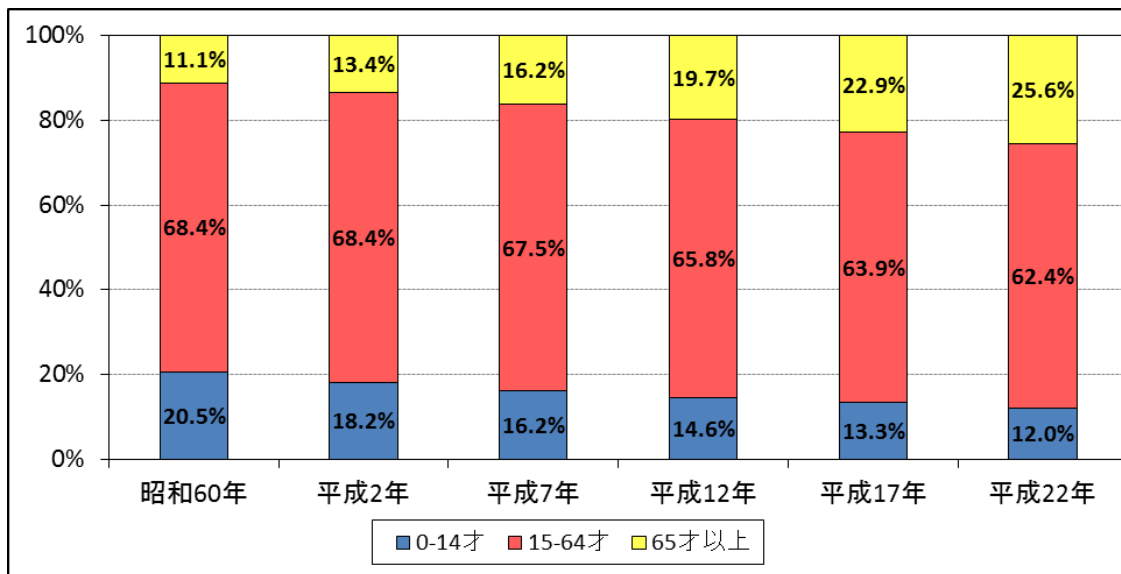
#### 【人口の推移(年齢別)】

(単位:人)

	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年
0-14才	39,630	34,703	31,465	28,151	25,051	21,829
15-64才	132,014	130,750	130,944	126,925	120,732	113,183
65才以上	21,341	25,591	31,451	37,954	43,199	46,401
合計	192,985	191,044	193,860	193,030	188,982	181,413

※年齢不詳は含まない。

#### 【年齢別人口構成比率】



※資料:国勢調査

#### ii) 産業

当市は、日本一の生産量を誇るりんごを始めとする第1次産業を中心に、第2次、第3次産業との結合を図りながら、地域資源を最大限活用した産業の振興を図っています。

産業別就業人口の推移を見ると、第1次産業就業人口が一貫して減少傾向にあります。産業別就業人口比率でも、第3次産業が増加傾向であるのに対して、第

1次産業は減少傾向にあります。しかし、第1次産業就業者の割合は、平成22年度の全国平均（4.2%）と比較すると3倍超（15.5%）と高くなっています。

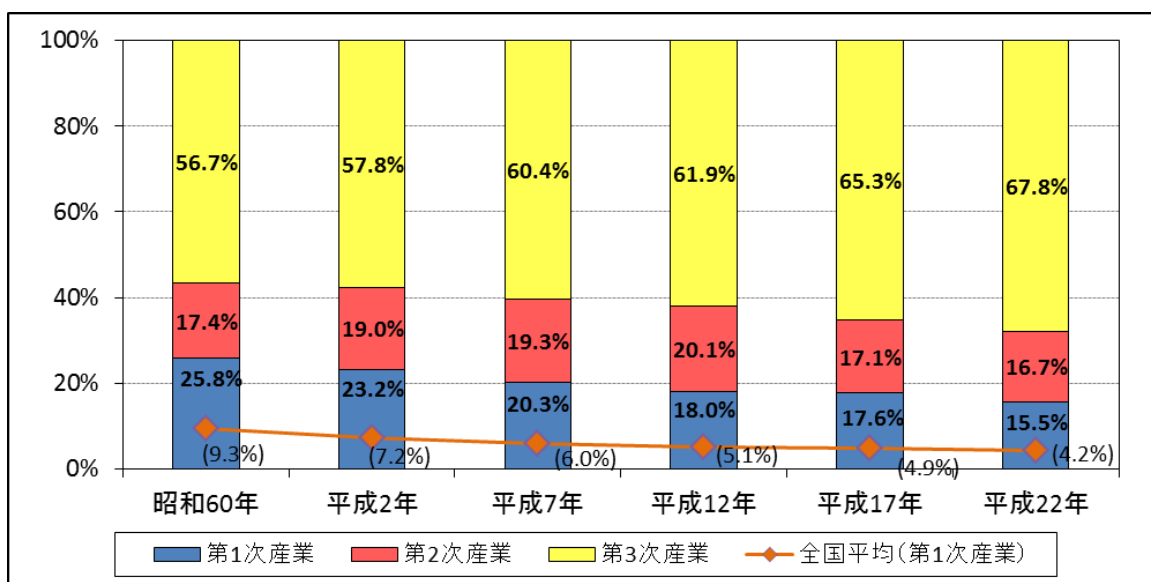
【産業別就業人口の推移】

（単位：人）

区分	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年
第1次産業	23,353	21,584	19,526	17,211	15,853	12,670
第2次産業	15,758	17,666	18,591	19,137	15,330	13,609
第3次産業	51,294	53,671	58,036	59,016	58,644	55,357

※分類不能の産業を除く。

【産業別就業人口比率】



※資料：国勢調査

iii) 交通

広域的な道路網として、東北自動車道が国道102号と黒石ICで、国道7号と大鱈・弘前ICでそれぞれ連結しています。また、市内東部を南北に縦貫する国道7号は青森市と秋田市を結んでいます。市の中心部から、主要地方道、県道が農村部、隣接市町村に向けて放射状に伸びています。

公共交通機関では、鉄道がJR奥羽本線の弘前駅は青森市、秋田市方面と、さらに、私鉄の弘南鉄道弘南線の弘前駅は黒石市と、弘南鉄道大鱈線の中央弘前駅は市の南部地域及び大鱈町と結んでいます。また、バスはJR弘前駅に近接したバスターミナルを起点に、首都圏や仙台市、盛岡市をつなぐ高速バスが運行されているほか、市街地及び農村部や隣接市町村を結ぶバスルートが高密度に形成されています。

## (2) 歴史的背景

### ① 津軽地方の形成

弘前における縄文時代の遺跡には、後期の代表的な遺跡として、弘前市十腰内の十腰内遺跡があります。ここからは、線で描かれた文様を主体とした土器やイノシシ型の土製品が発見されています。また、晩期では岩木山北東麓の大森勝山遺跡があり、ここからは、大型竪穴住居跡と祭事が行われていたことを示す環状列石が確認されたほか、後期旧石器時代のナイフ形石器も発見されています。

弥生時代では弘前市砂沢の砂沢遺跡から、日本最北の水田跡が発見され、この時期（紀元前3世紀頃）には稲作が行われていたことを示しています。

平安時代には平野部から集落跡が数多く発見され、岩木山麓では大規模な製鉄が行われていました。また、市内からは蕨手刀（わらびてとう）<sup>1</sup>も発見されていますが、この遺物は集団の中で長として権力を保持していた者が存在していたことを示しており、津軽地方でも群集墳<sup>2</sup>が存在していたと推定されます。

津軽地方の「津軽」は、文献に「津刈」・「津軽」・「都加留」・「東日流」などと書かれていますが、正史に見えるのは、斉明天皇元年(655)の津苧蝦夷6人に冠位を授けた（『日本書紀』）とあるのが最初です。なお、阿倍比羅夫（あべのひらふ）や坂上田村麻呂などの蝦夷討伐にかかわる伝説を持つ土地や社寺が数多くありますが、津軽地方が明確に文献に記されるようになるのは鎌倉時代からです。



### ② 中世安東氏と近世津軽氏

文治5年(1189)源頼朝が平泉の藤原氏を滅ぼした後、大河兼任が大規模な反乱を起こします。津軽惣地頭として鼻和・平賀・田舎三郡を管轄していた宇佐美実政などを駆逐して南下した大河軍は、文治6年2月に鎌倉幕府軍との一迫（現・宮城県栗原市）での戦いに敗れて壊滅し、以後、奥州惣奉行制によって津軽地方も鎌倉幕府によって管轄されるようになります。これにより、それまで全国政権による統制下に入ったことのない津軽地方も、内国化が急速に進んでいくことに

<sup>1</sup> 奈良～平安時代初期に使われた鉄製の刀で、柄頭が早蕨(さわらび)の芽を巻いた状態に似ていることからこう呼ばれた。

<sup>2</sup> 一定地域に多数の小規模な古墳が密集するもの。

なります。津軽地方は関東に本拠を置く有力御家人たちに地頭職が与えられ、現地の住人を代官・沙汰人として登用しましたが、13世紀半ばには、大部分が北条得宗領化し、得宗被官である曾我氏や工藤氏などによって経営されます。

その中で、津軽生え抜きの武士から地頭代官へ抜擢され、さらには、蝦夷管領（えぞかんれい）として、蝦夷支配や夷島流刑執行、北方世界との交易の統制を任せられるまでに成長した安東氏が、三津七湊の一つに数えられた十三湊に拠点置いて、環日本海交易によって大きな勢力を誇ります。

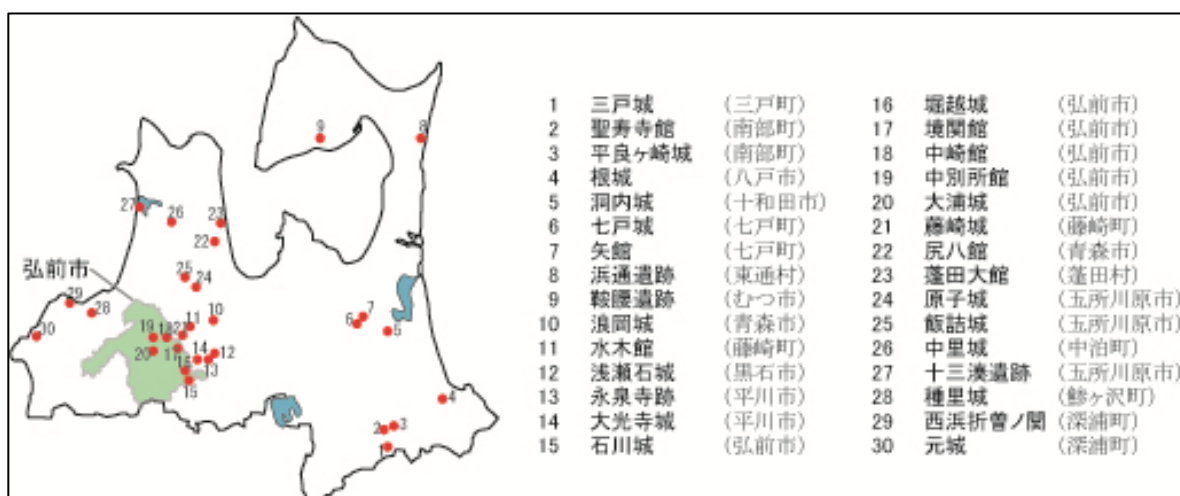
鎌倉幕府が滅んだ元弘3年（1333）から、津軽地方も動乱に巻き込まれ、朝廷方と幕府方、そして、南朝方と北朝方との間で抗争が繰り返されます。南北朝合体後、三戸南部氏が津軽地方へ進出し、安東氏と抗争を繰り返します。その過程で、南部久慈から津軽へ派遣されたのが南部（久慈）光信です。光信は、西津軽郡鱒ヶ沢町において延徳3年（1491）種里城を築城します。この光信が津軽家の始祖となります。

光信は、さらに、文亀2年（1502）鼻和郡賀田（現・弘前市）に大浦城を築き、子・盛信を置きました。

盛信以降、為信に至るまで同城に居城し、やがて、勢力を拡大しながら南部宗家から独立的な行動をとるようになります。

『津軽一統志』（享保16年（1731）完成の弘前藩初の官撰史書）によれば、為信は、元亀2年（1571）堀越城を前線基地として、南部氏の津軽支配のために派遣されていた南部高信（南部家26代当主となった信直の実父）の居城である石川城を攻略したのを皮切りに、津軽地方に割拠していた諸勢力を次々に駆逐し、天正18年（1590）に豊臣政権によって領主権を認められ、津軽氏を名乗るに至りました。

ここに津軽氏は、豊臣政権の「奥羽日の本仕置」においてその地位を認められ、近世大名として出発することになりました。





### ③ 城下町弘前の形成

藩祖為信は、文禄3年（1594）本拠を大浦城から堀越城に移しますが、その後、領国支配に最も適した土地として、岩木川と土淵川にはさまれた高台地を選びました。

この地に高岡城（弘前城）が完成し、堀越城から移転したのは弘前藩2代藩主信枚治世の慶長16年（1611）のことです。

この後、城郭内外の整備が行なわれる一方、城下町の建設も進められます。家臣団の城下集住が行なわれ、商工業者も種々の優遇策のもとに、領内のみならず全国各地から集められたとされています。

寛永末年の「津軽弘前城之絵図」（弘前市立博物館蔵）には、弘前城を中心に、北には、足軽町や小人町・禰宜町・町屋が町割されていて、八幡宮（現・弘前八幡宮）や伊勢太神宮（現・神明宮）があります。東には、町屋・小人町・侍屋敷・寺院街が町割され、東照宮・薬王院があります。南には、町屋と足軽屋敷、長勝寺を中心とした寺院街が並んでいます。さらには、城内の三之丸、四之丸にも侍町が町割されています。

東方は土淵川、西方は岩木川、北方は大久保堰が流れ、また南方には、慶長18年（1613）から造成された南溜池があり、この自然及び人工的な地形によって囲まれた地域が、当初の弘前城下でした。

城下に大きな変化が見られるのは、慶安2年（1649）に起きた城の東側にある寺院街の火災でした。この寺町大火と呼ばれる火災によって、城の東側の寺院街が焼失し、跡地には新たに町割が行なわれました。翌慶安3年（1650）に南溜池の南側に新寺町が町割されて、新たに寺院街が形成されました。



「津軽弘前城之絵図」(寛永末年)

寺町大火後、弘前城下に大きな変化を及ぼしたのは、侍屋敷の郭外移転と18世紀後半の武家の農村への移住でした。

前述したように、弘前城内には、侍町が町割されるなど多数の侍屋敷が存在していましたが、4代藩主信政の時代である17世紀の後半から、藩主権力の確立とともに、城内を政務機関の所在地にしようとする動きが見られるようになります。その動きは、元禄9年（1696）から本格化し、さらには、元禄8年（1695）の飢饉による財政悪化を要因とした家臣団の大量解雇が行われ、1,000人を超える家臣が城下を去り、城内の町割を大きく変化させます。



「弘前惣御絵図」(元禄の絵図)

侍屋敷の郭外移転は、宝永2年（1705）と同6年の移転で終わります。この結果、城の東側に下級藩士を中心とする侍町が形成され、さらには、新たな町割も行われて、城下の拡大や変容につながり、弘前城は政務機関と藩主家の居住地に専用化されたのです。

また、信政の時代に、弘前城の大手が北から南へ変更されています。それまでは、城の北側の亀甲町に面した北の郭北門（通称亀甲門）を大手としていましたが、参勤経路が矢立峠を越えて秋田領へ入る羽州街道になったため、大手も変更されました。これによって、城の南側の本町や街道沿いの土手町等が発展してきました。

寛政4年（1792）、藩士及び藩財政の困窮を解決する方策として、藩士を城下から在方へ移住させて直接生産活動に従事させ、農民から直接年貢を徴収することで藩士財源を藩財政から自立させることを目的とした藩士土着令が出され、大量の家臣が在方への移住を命じられました。これにより、城下町弘前の性格や景観は大きく変容します。城下町に残された家臣は上級家臣のごく一部と下級家臣のみとなり、弘前城下及び九浦（青森湊、鱈ヶ沢湊を始めとする領内の主要な湊と関所）に人返し令が出されて商人の数も整理され、城下町弘前は縮小再編成されることとなりました。

主として、城の東側の町域と宝永年間に形成された侍町が消滅し、町屋でも消滅する場所が現れ、城下は閑散とした状態に陥りました。

寛政10年（1798）の土着廃止令によって、城下に藩士たちが戻り、縮小していた町が復活します。その際、禄高により、移転先や住居規模の規定が設けられて、町割や景観に影響を及ぼしました。人口は、飢饉や政策的な移住などによる減少を除けば、ほぼ35,000人程度で幕末へと至ります。

現在、藩政時代の町割をもっともよく残しているのは、弘前城跡の北側に位置する仲町地区です。仲町地区は、地割の様子をよく残し、道路沿いに連続するサワラの生垣、点在する薬医門や板塀、茅葺や板葺の主屋など、武家町の景観をよく伝えていて、昭和53年に重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。築城当初、城の北側の大手先に町割された武家町を始まりとし、現在に至るまで、町割当初から残る地割を基本にした住環境が形成されています。



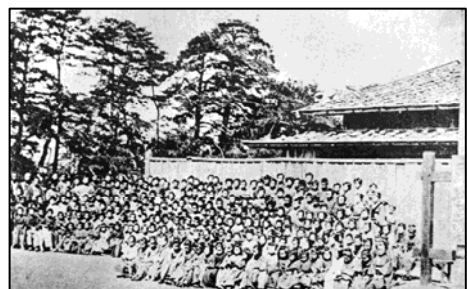
寛政の絵図

#### ④ 弘前の文明開化…東奥義塾とキリスト教

明治4年（1871）7月、弘前藩は廃藩置県によって弘前県となり県庁が弘前城内に設置されましたが、同年9月には、弘前県は青森県と改称されるとともに、県庁も弘前から青森へと移されます。

翌明治5年（1872）の学制頒布により、従来の旧藩校などはいったん廃止となり、学校教育体制確立に向けた布達が次々と発せられ、弘前では、同年11月、私学である東奥義塾が開学しました。

旧藩校の伝統を受け継ぐ各地の学校が公立となっていく中で、国や県からの補助を受けない私学の開学を可能にしたのは、旧藩主承



東奥義塾生集合写真(明治9年)※1



昭による財政援助が大きかったとされています。

東奥義塾は公立の教育体制がなかなか整わなかった津軽地方において、小学校教育や女子教育も手がけるなど、先進的な学校でした。特に、その教育を特徴付けたのは、開学当初から同校で教鞭をとった外国人教師たちで、このほとんどがキリスト教メソジスト派の宣教師であったことから、同校は津軽地方にキリスト教が広まる拠点ともなりました。中でも、弘前においてキリスト教や西洋文化の紹介に大きな功績を果たしたのが、アメリカ人ジョン・イングです。

イングによるキリスト教の伝道の功績としては、明治8年(1875)6月に行われた14人の東奥義塾生への洗礼です。その中には、芦川得一（県会議員・青森市長）、佐藤愛磨（外交官・宮中顧問官・男爵）、伊東重（医師・弘前市長・代議士）らが含まれていました。その後も、珍田捨己（外交官・枢密顧問・侍従長・伯爵）や山鹿元次郎（弘前教会牧師・弘前女学校・東奥義塾理事長）などが洗礼を受けています。

この明治8年(1875)6月の受洗は全国的にみても早いものであり、ロイ・L・ジョーンズによる小崎弘道・海老名弾正などのいわゆる熊本バンド<sup>3</sup>よりも1年早く、札幌バンドのウィリアム・S・クラークによる新渡戸稲造・内村鑑三などの受洗よりも2年早いものでした。同年10月には、弘前に教会が初めて組織されます。

イング夫妻は、このほかに、キリスト教の人権思想からくる男女平等思想や、讃美歌を始めとした西洋音楽を伝え、それまで、津軽地方では知られていなかったりんごや西洋の野菜、編み物なども伝えています。

このキリスト教の布教は、弘前における洋風建築と密接に関係しています。

最も早く建てられた洋風建築は、明治7年（1874）に本町に建った医院（佐々木元峻邸、平成9年（1997）解体）でしたが、弘前は、キリスト教伝道の先進の地ということもあり、早くから洋風の教会堂が建築されていました。

最も早いキリスト教関係の洋風建築は、明治15年(1882)に百石町小路の現在地に建築された天主堂（現カトリック弘前教会）です。

現存する弘前カトリック教会会堂は明治43年（1910）に再建されたもので、イタリアロマネスク様式でまとめられ、尖塔や半円形アーチの開口部が特徴的な建物です。また、内部には、神の人間への救いの歴史や弘前のシンボルである岩木山、五重塔、りんごなどを



カトリック弘前教会

<sup>3</sup> キリスト教青年団。

描いたステンドグラス<sup>4</sup>や畳敷きがあることも特徴的です。

明治30年(1897)に再建された弘前美以教会堂(現日本キリスト教団弘前教会)はゴシック様式の建物で、正面玄関には高くそびえる尖塔があり、玄関を始め各開口部はポインテッドアーチ、四方はバットレスで飾られていました。明治37年(1904)の焼失後、同39年(1906)に建てられた現在の建物は、熱心な信者であり、クリスチャン棟梁と呼ばれた桜庭駒五郎の設計でした。

明治33年(1900)には、山道町に日本聖公会弘前昇天教会が建てられました。大正9年

(1920)に改築された現存の聖堂は、煉瓦造平屋建てでゴシック様式でまとめられています。設計は、現在、愛知県明治村に保存されている京都河原町の聖ヨハネ教会堂と同じJ・M・ガーディナー(アメリカ人。宣教師、建築家)であると言われていています。正面右寄り上部の三葉飾りのアーチにある鐘は、今でも朝夕の祈りの時間に清澄な音で時を告げ、市民に親しまれています。

また、教会堂の建設に伴い、日本聖公会弘前昇天教会司祭館(明治33年(1900))、東奥義塾外人教師館(明治34年(1901))、弘前学院外人宣教師館(明治37年(1904)登記済)、日本キリスト教団弘前教会牧師館(明治37年(1904))等の司祭や牧師のための住居建設も行われるようになりました。これらは、構造・造作ともに洋風ですが、履き替え玄関や畳敷きがあったりするなど、一部和風の要素も取り入れられています。



日本キリスト教団弘前教会礼拝堂



日本聖公会弘前昇天教会



旧東奥義塾外人教師館

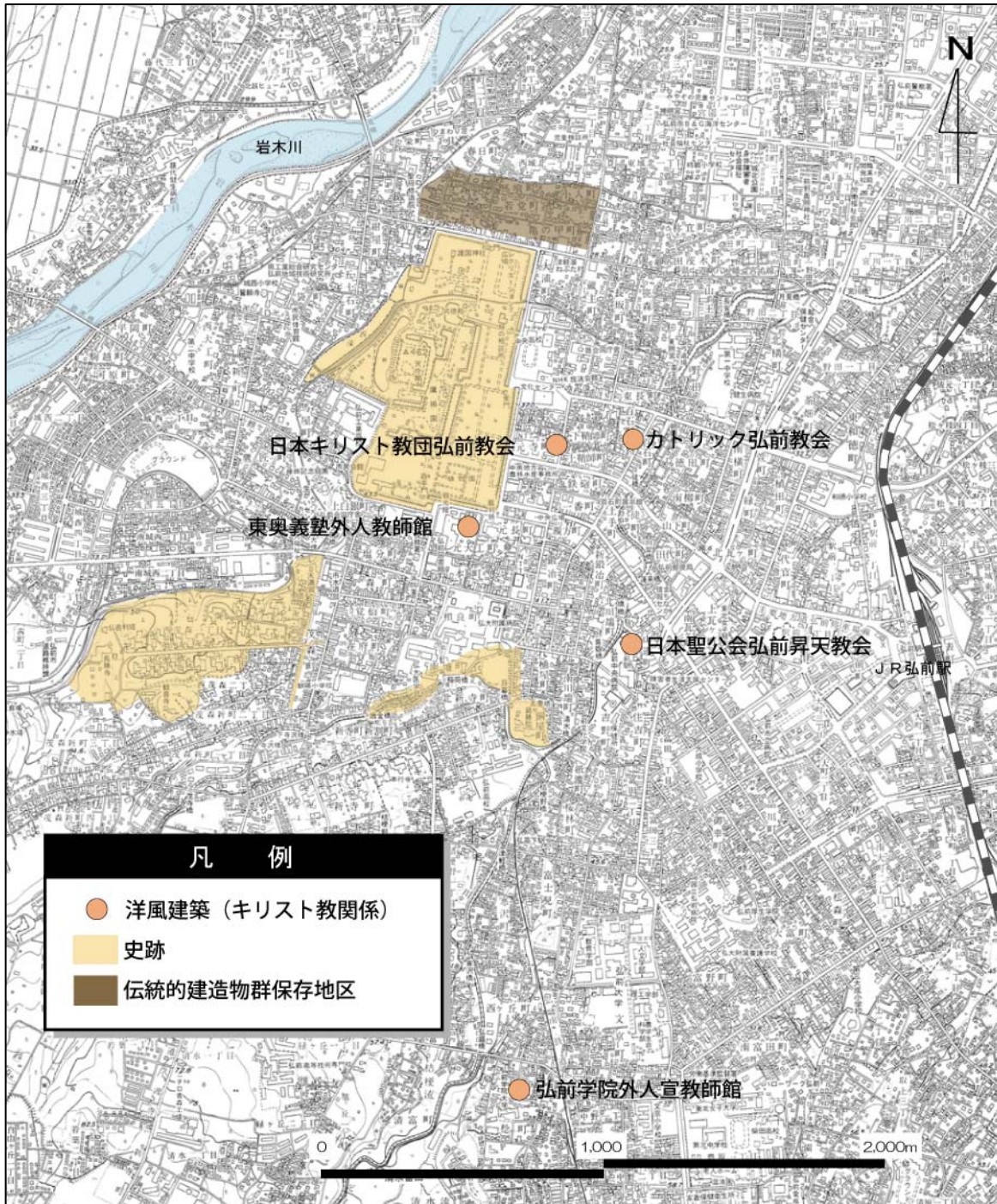


弘前学院外人宣教師館

<sup>4</sup> 昭和59年(1984)、カナダのカーロン神父により製作、寄贈されたもの。



○キリスト教関連の洋風建築物の位置図



## ⑤ 弘前りんごの誕生

りんごが初めて弘前に紹介されたのは、明治8年(1875)のことです。

東奥義塾教師ジョン・イングは、12月25日のクリスマスに当時の教え子や信者たちに西洋りんごを振る舞っています。ここから栽培に至る経緯には諸説ありますが、一説では、当時の東奥義塾塾長菊池九郎が、このりんごの種を自宅の庭に播種し、後年、この穂木を接木したのが、弘前におけるりんごの育種及び繁殖の発祥とも言われています<sup>5</sup>。



また、りんご栽培の発展にもキリスト教宣教師が大きく関わっています。明治15年(1882)に来弘した弘前カトリック教会のフランス人宣教師ウルバン・フォーリーは、りんご剪定や肥料、その他の栽培指導を行いました。

りんごの栽培は、先覚者たちの努力と研究によって成功の道を歩み、各所にりんご園ができるようになります。

りんごは生食用として優れ、加工用としても用途が広がったため、士族達が新規の事業として取り組みました。

明治23年(1890)、東京で開催された第3回内国勸業博覧会で、弘前のりんごは有功2等賞を受けます。その後、次第にりんごの商品価値が認められ、鉄道の開通などもあって、東北から北海道・関東・関西まで販路を広げていきます。

明治31年(1898)頃から、りんごはさまざまな病虫害に遭い大打撃を受けますが、明治37年(1904)頃からは、りんごの袋掛け(有袋栽培)や薬剤散布の導入、新しい剪定方法が研究されるなど栽培技術が著しく進歩し、産業としてのりんご栽培が発展していきます。



明治40年代のりんご園※1

それに伴い、栽培用の道具も充実していきます。代表的なものとしては、明治37年(1904)頃、弘前で初めて製作されたとされるりんご剪定鋏があります。この技術は、弘前の伝統工芸・津軽手打刃物として、現在でもりんご剪定鋏や包丁等の製作に活かされています。



りんごの収穫

昭和初期には、我が国におけるりんご生産の約7～8割が、津軽地域を中心とした青森県産で占めていました。弘前では、高杉、裾野、新和

<sup>5</sup> 社団法人青森県りんご対策協議会ホームページ。



など岩木山麓の集落にもりんご栽培が広がっていき、台地の清水・千年、沖積地の藤代等では普通畑が一斉にりんご畑に変わるなど、かつて、大根、菜種の産地と言われた地域の農村景観は大きく変貌していきました。

残雪の岩木山を背景に、山麓まで一面に広がるりんご園で華麗に咲き誇る白いりんごの花の景色は、昭和初期から、現在に至るまで変わっていない弘前ならではの景観で、「青い山脈」等で知られる弘前出身の作家石坂洋次郎は小説「わが日わが夢」（1946）の中で故郷である津軽を、『物は乏しいが空は青く雪は白く、林檎は赤く、女達は美しい国、それが津軽だ。私の日はそこで過され、私の夢はそこで育まれた。』と述懐しています。今では、津軽人のふるさととも言えるこの景観を広く紹介することを目的にりんご花まつりが、りんご公園において最初に開催されたのは昭和39年（1964）です。現在では、さくらまつりの直後に行われる弘前の春のもう一つの風物詩として定着しており、上記の石坂の言葉も記念碑として刻まれ、りんご公園内に置かれています。



りんご花まつり

## ⑥ 軍都弘前の隆盛

弘前が軍都としての歩みを始めることになったきっかけは、日清戦争にありました。

日清戦争は、日本の勝利に終わりましたが、ロシア・ドイツ・フランスの三国干渉に遭い、遼東半島を返還することになったため、日本国内では、「臥薪嘗胆」を合言葉に、これまで国内治安の維持を主たる目的としてきた軍隊を、外征軍として育成しようとし、師団を拡張しました。

明治29年（1896）の陸軍管区改正により、第7師団から第12師団まで6師団を増設することになり、弘前には第8師団が置かれます。この結果、これまで仙台の第2師団に属していた青森・岩手・秋田三県は、新たに第8師団に属することになりました。

第8師団のほとんどの施設、歩兵第31連隊、騎兵第8連隊、工兵第8連隊（明治42年（1909）に盛岡へ移転）、野砲兵第8連隊、輜重（しちょう）兵<sup>6</sup>第8連隊、

<sup>6</sup> 水食料・武器弾薬・各種資材など様々な物資を第一線部隊に輸送して、同部隊の戦闘力を維持増進することが主任務である部隊。

憲兵隊、予備病院（のち衛戍（えいじゅ）<sup>7</sup>病院⇒陸軍病院）などは市の南郊に設置され、兵器支廠と陸軍火薬庫は弘前城旧三の丸に設置されました。

また、旧弘前偕行社（現・弘前厚生学院記念館）は、名匠・堀江佐吉<sup>8</sup>によりこの時期に建築された洋風建築で、主に将校の社交場や物販・厚生施設として活用されていました。

県庁が青森市に置かれて以来、政治の中心が青森に移り、経済的にも衰退の途をたどっていた弘前は、軍都として再び発展していくこととなりますが、当時の弘前の様子を、作家田山花袋は次のように描写しています。



旧弘前偕行社

『 県庁を青森に取られて次第に衰へた津軽歴代の城市、商業も工業も活気を失って半蔵を深雪の中に埋められる淋しい市街も、日清戦役後、第8師団の増設と共に新しい活動の気は到る処に充ち渡つた。劍鞘を鳴らして勇ましく街道を歩み行く青年士官の群れは、尠（すく）なくとも古く衰へた屋敷町の津軽少女の眼を聳（そばた）しむるに十分であつた。』（田山花袋『生』第18章）

こうして、師団の開設とそれに先立つ明治27年（1894）の弘前～青森間の鉄道開通によって、おびただしい外来の転住者と物資の流通が招来され、弘前の経済も活況の兆しを見せるようになり、土手町・元寺町・百石町など新たな商業地が形成されていきます。

兵營が設けられた市の南郊、清水村の富田や館野、桔梗野一帯の田園地帯は新しい市街地に変わり、兵營に近接する富田町、新寺町、住吉町界限には、将校や下士官のための下宿屋、兵隊相手の飲食店、小料理屋などが建ち並びました。

鍛冶町、銅屋町、桶屋町など藩政時代からの職人町も、新たに軍用品の注文を受けて活況を取り戻しました。



中土手町(明治30年代)※1

<sup>7</sup> 帝国陸軍において、陸軍軍隊が永久一地に配備駐屯すること。その土地を衛戍地と称した。

<sup>8</sup> 弘化2年（1845）、祖父の代からお城大工を務める弘前藩お抱え棟梁の長男、名匠堀江家の5代目として弘前に生まれる。函館で洋風建築の技術を身につけた後、東奥義塾の校舎を皮切りに洋風建築を多く手がけ、旧第五十九銀行本店本館、旧弘前市立図書館、旧弘前偕行社、斜陽館など、斬新で華麗な建物を数多く手がけた。

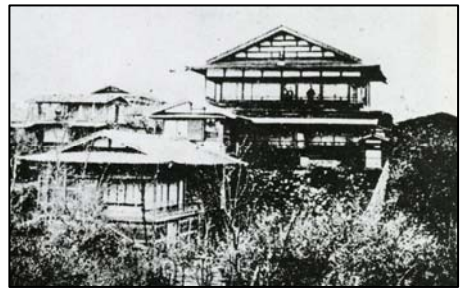
また、和徳町、松森町、駒越町、浜の町、茂森町など、近郊の農村の出入り口に当たる町筋は、呉服商、古着屋、小間物屋、日用雑貨店、飲食店などが立ち並び、農家を顧客に繁盛し、賑わいを見せました。

当時、町の建物は商家も住宅もほとんど桎葺（まさぶ）き<sup>9</sup>の屋根でしたが、師団開設に伴う経済効果により、次第に洋風建築や蔵造りなど都会風の外観に変わっていきます。

洋風建築では、教会関係の建物のほかに、明治37年(1904)に第59銀行本店本館（現青森銀行記念館、重要文化財建造物）、同35年(1902)には弘前市立病院が本町に建築されました。

蔵造りでは、明治27年(1894)の和徳町の久一呉服店が最初で、次第に商家の流行建築になり、同33年(1900)には百石町の樽沢屋と土手町の仏師本間が、同36年(1903)には和徳町竹清が建築されました。その他に、明治26年(1893)に、角み呉服店が、蓬莱橋から下土手町に移転して3階建ての洋館を建て、同34年(1901)には、代官町から角は支店が同じく下土手町の角に進出し、3階建ての洋館作りの偉観を競いました。

また、本町5丁目の酔月楼、椽（くぬぎ）ノ木（本町坂から辻坂までの一帯）の峰月館、桶屋町辻の新若松楼などの料亭、さらに、弘前随一の高楼と言われた一番町佐々木旅館の三階楼集雲館など、それぞれ粋を凝らした高楼建築<sup>10</sup>が建ち並びました。



椽の木峰月館(明治40年)※2

明治39年(1906)には、当時最も斬新な洋館建築と評された弘前市立図書館（現在追手門広場に移築、県指定文化財）が、追手門前の外堀近くの東奥義塾に隣接して建築されました。

師団の諸軍事施設は、現在の弘前城付近ないし弘前大学付近に集中しており、その規模は広大でした。

日露戦争を経て、既に、弘前市には歩兵第31連隊が設置されていましたが、さらに、歩兵第52連隊が新設されました。

第八師団長官舎（現弘前市長公舎、登録有形文化財）が追手門前に建設されたのは、第一次世界大戦中の大正6年（1917）で、官舎は陸軍省の櫛部宇市が設計し、堀江佐吉の四男斎藤伊三郎が施工しました。

その後、第一次世界大戦後のワシントン会議では、軍艦保有量の縮小が決定され、関東大震災により日本の財政が危機に陥ったことにより、軍縮を要望する世論が高まることとなります。

<sup>9</sup> 台形の板（こけらいた）の厚みのある方を下に、羽重ねにして屋根を葺くこと。

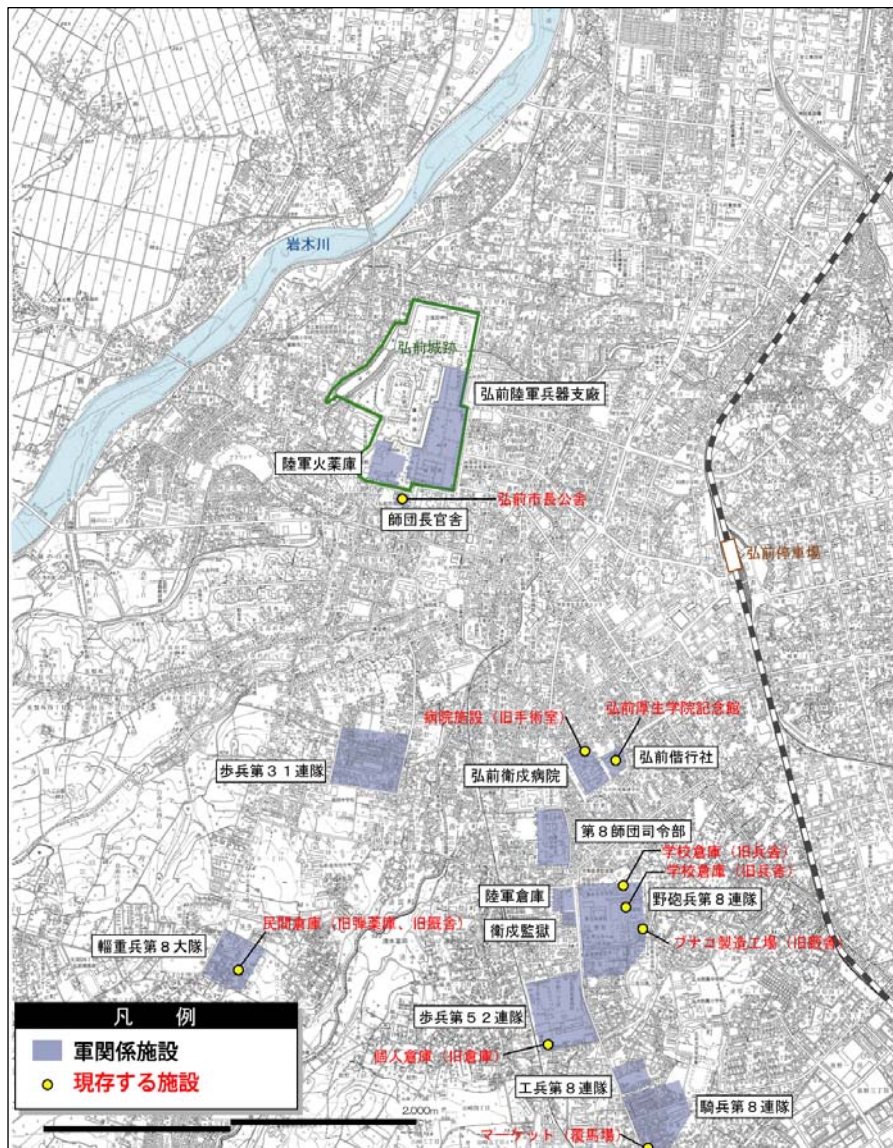
<sup>10</sup> 重層の建築物のこと。



これを受けて、大正14年(1925)5月、歩兵第52連隊が解散されました。

太平洋戦争では、弘前市は結果的に空襲を受けませんでした。一部、弘前駅周辺の建物が、建物疎開<sup>11</sup>により取り壊されました。戦争末期にはアメリカ軍による本土空爆が激しくなり、青森県内では、青森、八戸、三沢の陸海航空施設が襲撃され、青森市では市街地が空襲を受けました。当時の弘前市では、市街地の空爆を想定して、市街地中心部の大部分の建物を対象にした第二次建物疎開を計画しましたが、実施される直前に終戦となります。弘前市は単に空襲がなかったことに加え、建物疎開の規模も小さかったことで、弘前城天守や弘前市の出身で日本商工会議所会頭であった藤田謙一の別邸（藤田記念庭園）などの歴史的建造物や、戦前の街並みが残されたといえます。

### ○第8師団関連施設の配置と建造



<sup>11</sup> 空襲対象となるような建築物を取り壊し、道路・水路などを確保すること。



## ⑦ 終戦による師団の解体と学都としての歩み

第二次世界大戦後の我が国では、GHQの指令と新憲法の制定を受け、軍事施設の解体が進められます。第八師団を抱えていた弘前では、軍事施設及び軍事施設跡地の多くが学校施設に利用されました。

被服倉庫は、弘前市立商業学校（現・県立弘前実業高校）の移転の際に一時使用され、弘前偕行社は弘前女子厚生学院（現・弘前厚生学院）に払い下げられ、現在も一部は校舎として使用されています。野砲兵第8連隊の旧兵舎は私立柴田女子高校の校舎として使用されましたが、すべて取り壊されました。

第8師団司令部は、終戦後、国立弘前大学農学部が内部を改造して使用しました（昭和42年(1967)に解体）。

野砲兵第8連隊の敷地規模は約16万㎡で、兵舎、倉庫、砲舎、厩舎など、28棟以上の施設が配置されていました<sup>12</sup>。これらの施設は、学校施設や病院施設として使用されておりましたが、そのほとんどが取り壊され、わずかに現存している建物としては、厩舎が弘前の新しい工芸品・ブナコの工場として現在も使用されています。

追手門前の旧第8師団長官舎は、戦後進駐軍の軍政官官舎として使用され、昭和26年(1951)に市が大蔵省から払い下げを受けました。瓦葺きの屋根、玄関前の妻入り破風<sup>13</sup>などは、建築当時のまま保たれています。

戦後の弘前市では、いち早く高校や大学など高等教育機関が開校していき、現在は、国立弘前大学を始めとして4大学、2短期大学、10の高等学校を有する学都として生まれ変わりましたが、これは、終戦により主を失った軍用地や施設を学校用地や施設として、活用することができたからとも言えます。



野砲兵第8連隊



旧第8師団長官舎

<sup>12</sup> 『弘前市地図』1909 北辰社

<sup>13</sup> 妻入り部分にできる三角形の造形のこと。建物の短辺側、あるいは屋根の棟と直角である面を「妻」といい、「妻入り」とは、建物の「妻」側から出入りするものを妻入りという。

## ○第八師団関連施設の跡地利用

	施設名称	所在地	転用施設	現状(赤字は建造物が現存)	備考
1	弘前借行社	御幸町8	弘前女子厚生学院	弘前厚生学院記念館	国指定重要文化財建造物
2	師団長官舎	上白銀町1	弘前市長公舎	弘前市長公舎	市指定趣のある建物
3	師団長副官官舎	下白銀町1			
4	第八師団司令部	文京町	国立弘前大学農学部	国立弘前大学農学生命科学部	
5	弘前憲兵隊本部	〃	国立弘前大学	国立弘前大学	
6	歩兵第四旅団司令部	〃	〃	〃	
7	弘前連隊区司令部	〃	〃	〃	
8	第八師官軍法会議	〃	〃	〃	
9	歩兵第三十一連隊	桔梗野2・3丁目 中野2・3丁目	弘前市立桔梗小学校 住宅地	弘前市立桔梗野小学校 住宅地	
10	歩兵第五十二連隊	中野2・3丁目	弘前市立商業高校グラ ド 住宅地	青森県立弘前実業高校 住宅地 個人倉庫	
11	騎兵第八連隊	松原東2・3丁目	マーケット 住宅地	マーケット 弘前市立松原小学校 住宅地、商業地	
12	野砲兵第八連隊	豊原1・2丁目 北園1丁目	東北女子短期大学 柴田女子高校 東北栄養学校 弘前市立第三中学校 病院施設ほか	東北女子大学倉庫(2棟) 柴田女子高校 弘前市立第三中学校 病院施設(一部) ブナコ製造工場	東北女子大学の敷地内 に、厩舎及び兵舎がそ れぞれ1棟ずつ残って おり、これらは倉庫とし て使用されている。
13	輜重兵第八大隊	清水3丁目	住宅地、倉庫	住宅地 個人倉庫(2棟)	
14	工兵第八大隊	松原東1・2丁目	住宅地	住宅地	
15	第八師団通信隊	豊原1丁目	東北女子短期大学	東北女子大学	
16	被服倉庫	中野1丁目	弘前市立商業高校 住宅地	弘前市立文京小学校 住宅地	
17	衛戍監獄	〃	〃 〃	〃 〃	
18	兵器支廠	下白銀町	国立弘前大学教育学部	弘前公園	
19	弘前衛戍病院	富野町1	国立弘前病院	国立弘前病院施設	
20	第八師団糧秣倉庫	豊原2丁目 三岳町	住宅地	住宅地	
21	射撃場	館野1丁目 原ヶ平字山中	クレー射撃場	りんご園地、田 住宅地	
22	練兵場	大開1～3丁目 鱒ヶ沢町長平町	住宅地 りんご園地ほか	住宅地 りんご園地ほか	
23	号砲台	文京町	住宅地	住宅地	
24	陸軍墓地	原ヶ平字山元	りんご園地	りんご園地 弘前大学農場	長勝寺に移葬
25	水源地	悪戸字後沢	水源地	水源地	

## ⑧ 造り酒屋と近代建築

### i) 弘前における酒造りの歴史

現在、弘前には数軒の造り酒屋が事業を営むのみとなりましたが、藩政時代から戦前にかけては、清らかな水と寒冷な気候ゆえ酒造りに適した地として、東北地方を代表する酒の生産地でした。

弘前藩 4 代藩主信政の時代に大々的な開田に着手し、17 世紀後半には実質 30 万石以上の米が生産されており、これらの米をもとに酒造業界は発展し、藩政時代中頃には弘前藩の領内で造り酒屋は 200 軒を超え、弘前城下町だけでも 100 軒以上ありました。

『弘前市史』によると、

「元禄 3 年（1690）ころ城下で酒屋（酒造業）を営む者は、本町支配で 12 人、土手町支配で 22 人、和徳町支配で 12 人、茂森町支配で 8 人、亀甲町支配で 10 人、東長町支配で 15 人、新町支配で 14 人、紺屋町支配で 10 人、親方町支配で 3 人、下鍛冶町支配で 1 人、計 108 軒（実数は 107 軒）、すこぶる多い。」とあります。

弘前の城下町は、秋田県境の山脈から北方に延びる舌状台地の先端に位置して、岩木川と土淵川に挟まれています。造り酒屋の多くは、この岩木川と土淵川の流域に位置しており、わき水を仕込み水にして酒を造っていました。

明治 4 年（1871）の廃藩置県後、酒の県内需要が伸び、さらに、明治 24 年（1891）の東北本線上野～青森間の開通により、北海道や大陸への玄関口として青森港の整備が進められ、販路と需要が拡大していきました。特に、米のとれなかつた北海道に酒の移出が行われていました。

その一方で、関西から銘酒が売り込まれるようになり、他産地との競争も始まりましたが、それに刺激されて地元の老舗造り酒屋も上方から杜氏を呼んで改良を加え、良質の酒を作り出すようになりました。

しかし、昭和 16 年の企業許可令と昭和 17 年の企業整備令により、当時の青森県内の造り酒屋 76 軒のうち、強制的に休養や廃業に追い込まれたのが 42 軒あり、弘前においてもこの時期に廃業する造り酒屋が多くありました。

戦後、大手酒造メーカーの進出、嗜好の多様化による日本酒離れなどもあり、弘前の造り酒屋は統廃合を繰り返して減少を続けますが、現在でも市内で 6 軒の蔵元が暖簾を守り続けています。

このうち、清酒松緑醸造元(株)齋藤酒造店は、岩木川の東側流域に酒蔵を構える明治 37 年（1904）創業の老舗造り酒屋です。幕末期は、酒母を造って津軽一円の酒造家に販売していましたが、各酒造家が自製の酒母を造るよう



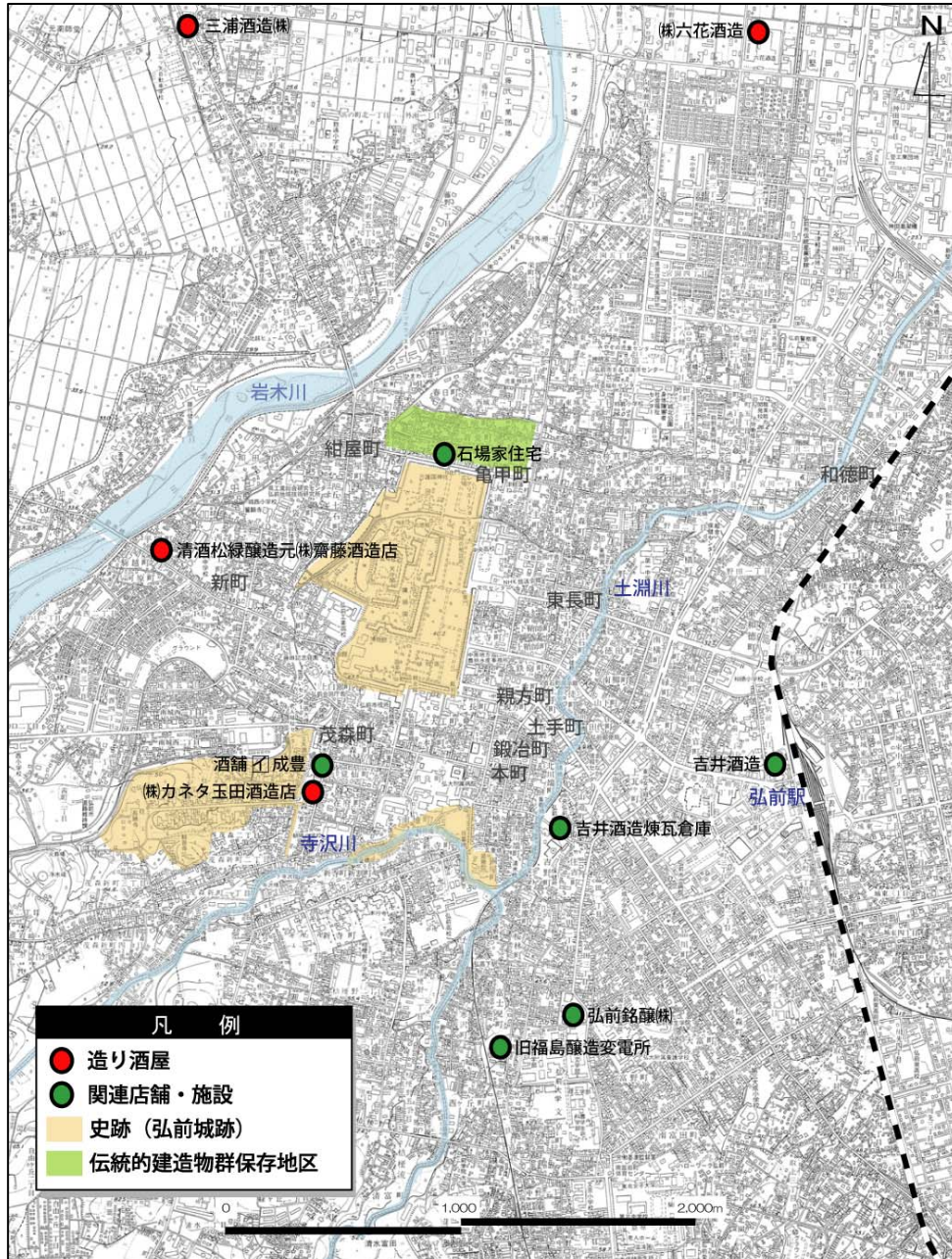
清酒松緑醸造元(株)齋藤酒造店



なったため、家業の酒母屋から酒造家に転じたものと伝えられています。

蔵の敷地内には、樹齢300年を超える老松が残り、黒板塀と酒造蔵の趣と相まって、歴史と伝統を感じさせる古風豊かな風景を作り出しています。建物は弘前市趣のある建物に指定されています。

○弘前市中心部の造り酒屋の位置図



※市内ではこのほか、東目屋地区において白神酒造と中竹酒造店の2件の造り酒屋が営業している。



## ii) 弘前の酒造界近代化の先駆者 福島藤助と近代建築

明治から大正時代にかけての弘前の酒造界を代表する人物が福島藤助<sup>14</sup>です。藤助は明治40年（1907）に酒造りに適した清水が湧く清水町吉田野（現在の吉野町<sup>15</sup>）に福島酒造を、さらに、大正6年（1917）には近接する富田字名屋場（現在の富田三丁目）に富名醸造を設立しました。

福島酒造では清酒「吉野桜」を、富名醸造では清酒「富名正宗」を造り、その販路は弘前市にとどまらず、青森県内や北海道など県外へも移出され、特に小樽には直営の販売店を設け、そこから樺太にも輸出していました。

福島藤助が誇る業績の一つとして、「四季醸造」の導入があります。酒造りは、「寒造り」といって冬の厳寒期に造る方法が一般的で、当時の日本全国の造り酒屋はこの方法を採用していましたが、藤助は、季節に関係なく年中いつでも酒造りができる四季醸造を導入しました。

吉田野の工場には、製氷機、蒸気機関、精米機、細菌学研究設備が備えられ、冷却装置も設けられて醸造場を四季の変化にかかわらず、一定の温度に保つよう工夫されました。これらの設備と独自の醸造法によって、気温の変化に関係なく四季を通じて醸造ができるようになりました。

藤助による四季醸造の導入は、純粹酵母仕込み<sup>16</sup>による四季醸造法で、大正末期の日本酒造業界では革命的と言えるものでした<sup>17</sup>。

また、藤助は、冷却装置運転等のための動力を自力で賄うために、大正13年（1924）に当時の相馬村紙漉沢（現在弘前市紙漉沢）に水力発電所を建設し、生産量の増大とともに、東北随一の酒造メ



旧福島酒造発電所（吉井酒造発電所）



旧福島醸造変電所

<sup>14</sup> 福島藤助（ふくしま とうすけ）（1871～1925）は、弘前市西茂森町出身。大工から酒造業に転じる。近代的工場生産により、東北・北海道で首位の生産量をほこった。酒造業にとどまらず、食品製造業、製糸業、印刷業などにも進出し、当時の弘前を代表する経済人でもあった。

<sup>15</sup> 福島醸造の清酒「吉野桜」が町名の由来となっている。

<sup>16</sup> 酒母なしでモロミを造る方法。

<sup>17</sup> 福島酒造の四季醸造については、営業ベースで成功していたかどうかについては、確証がとれていない（川島智生（2004）「醸造家と建築 64」『醸界春秋』）。

一カーとなりました。

一方で、巨額の工費を要した水力発電所建設などの設備投資が負担となり、昭和の初めにかけて、福島酒造を始め富名醸造などの一連の事業は福島家から離れることになりました。

吉野町の福島酒造の酒蔵は、その後、吉井酒造を経て、ニッカウキスキー弘前工場として昭和40年（1965）までシードルを生産していました。富田三丁目の富名醸造は弘前銘醸（株）に引き継がれましたが、昭和60年（1985）に清酒醸造が廃されました。

現在、藤助の酒造り自体を継承するものはありませんが、藤助が好んだ赤煉瓦造を始めとする多くの建築物が弘前に残されています。

藤助が初めて酒造蔵を建てた場所（茂森町）には、現在、酒小売店である「酒舗カクイ成豊<sup>18</sup>」（弘前市趣のある建物）が建っており、街道筋にあった酒屋としての趣を醸し出しています。

富名醸造の赤煉瓦の酒造蔵は、弘前大学に隣接する弘前銘醸の倉庫として現在でも使用されています。



酒舗 成豊（市趣のある建物）



旧富名醸造（弘前銘醸倉庫）

また、総建て坪2,200坪で敷地面積3,700坪、建物は工場と倉庫を含め10棟からなる福島酒造の巨大な工場群が建っていた吉野町には、現在、赤煉瓦倉庫が2棟残されています<sup>19</sup>が、これだけの規模の清酒工場は戦前では日本有数のものと考えられます。

吉野町は弘前の商業の中心・土手町に隣接しますが、土手町から赤煉瓦倉庫へは、弘前昇天教会（県指定文化財）脇の当時から変わらぬ小路を通



旧福島酒造（吉井酒造煉瓦倉庫）脇の小路

<sup>18</sup> 酒舗カクイ成豊は、藤助の義理の弟である成田豊助が創業した。平成20年弘前市趣のある建物に指定された。

<sup>19</sup> 現在は吉井酒造(株)により、所有・管理されている。



ります。赤煉瓦倉庫へ着くと、広々とした緑地、旧料亭、西側を流れる土淵川、川に沿って走る弘南鉄道の線路などに囲まれるノスタルジックで静寂な空間が広がっています。この風景は、今や弘前市を代表する景観となり、多くの市民に親しまれています。

また、この酒蔵だった建物では、弘前出身の美術家・奈良美智の展覧会が平成17年（2005）から平成19年（2007）に渡って計3回開催されるなど、市民に愛され現在も活用される産業遺産になっています。



旧福島酒造（吉井酒造煉瓦倉庫）



旧福島酒造（吉井酒造煉瓦倉庫）と、弘南鉄道、吉野町緑地、奈良美智の犬のオブジェ

○旧福島酒造（現吉井酒造煉瓦倉庫）周辺地図





### ⑨ 近代建築の巨匠前川國男

当市の歴史的なまち並みを形成する特徴的な要素として、市内に数多く残されている前川國男が手がけた建築物が挙げられます。

前川國男は、日本を代表する近代建築の巨匠で、代表作に東京開都 500 年の記念事業で建築された本格的なオペラ劇場と小ホール、音楽資料室などからなる東京文化会館などがあります。

前川は、昭和 3 年（1928）に東京帝国大学工学部建築学科を卒業後パリへ渡り、巨匠ル・コルビュジエの下で 2 年間、モダニズム建築について学ぶこととなりますが、その際、後見人となったのが、弘前藩士の娘であった母の兄、佐藤尚武でした。

佐藤尚武は、国際連盟帝国事務局長としてパリに駐在し、前川がル・コルビュジエアトリエに入る際に後見人として自宅に預かります。

その後、前川は佐藤尚武を通じて、当時、駐仏武官としてパリに在住していた弘前市出身の木村隆三と親交を深めることになり、自身の処女作となる「木村産業研究所」の設計依頼を受けることとなります。

以降、前川と弘前市の関係は緊密となり「弘前中央高校講堂」や「弘前市庁舎」など、数多くの公共建築物を手がけ、現在、8 点もの前川作品が市内に残されています。

#### 【市内に現存する前川作品】



木村産業研究所（1932）



弘前中央高校講堂（1954）



弘前市庁舎（1958）



弘前市民会館（1964）



弘前市立病院（1971）



弘前市立博物館（1976）

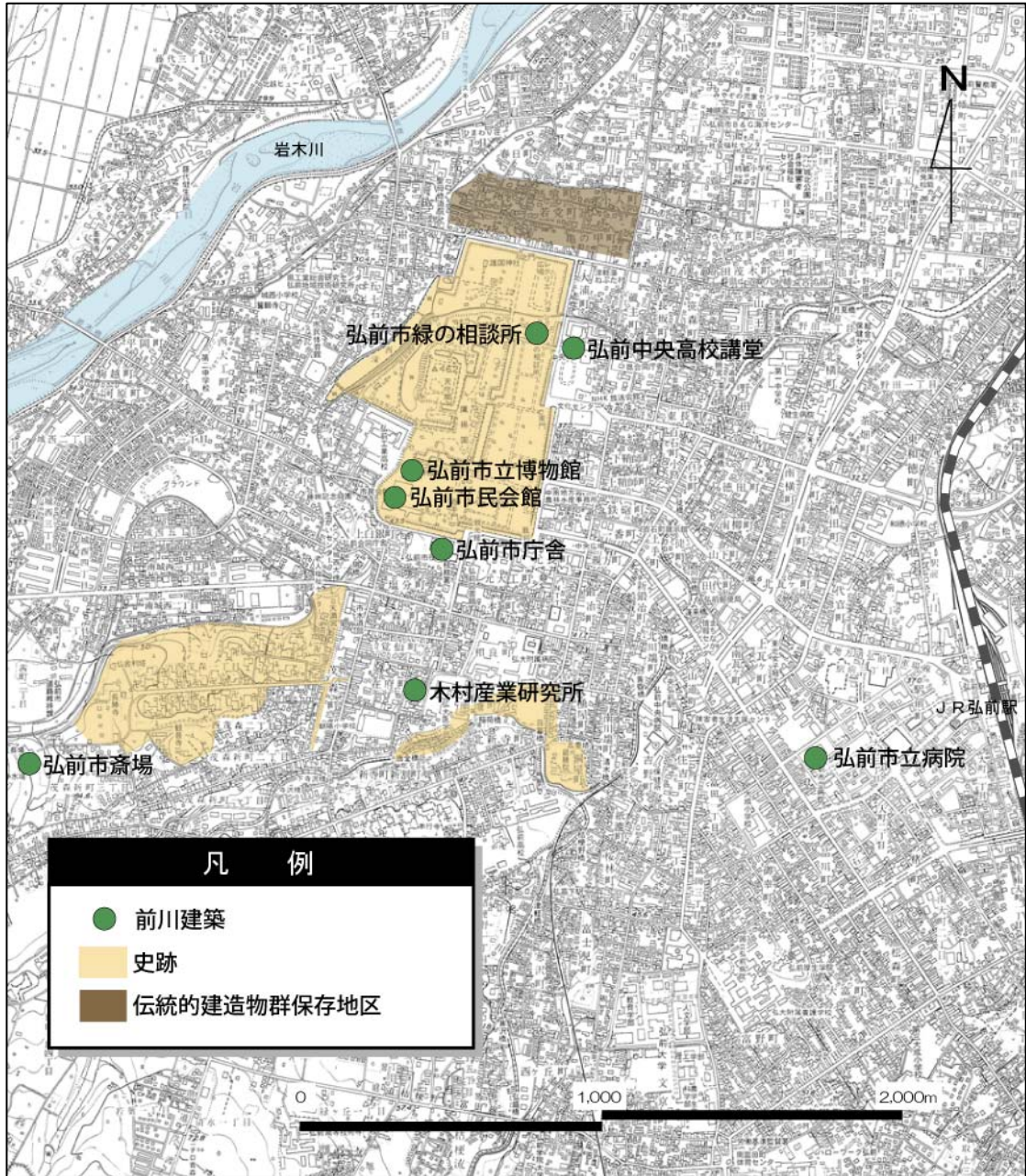


弘前市緑の相談所（1980）



弘前市斎場（1983）

○前川建築の位置図



### （3）文化財の分布状況及び特徴

#### ① 文化財の分布状況

##### i) 国指定等文化財

弘前市には、現在、国指定・選定文化財が31件存在します。その内訳は、建造物21件（43棟・3基）、工芸品4件、考古資料2件、無形の民俗文化財2件、遺跡2件、名勝地1件、伝統的建造物群1件です。建造物は、弘前城天守を始め二の丸辰巳櫓・二の丸未申櫓・二の丸丑寅櫓・二の丸南門・二の丸東門・三の丸追手門・三の丸東門そして北の郭北門からなる弘前城内の建造物が含まれます。国指定文化財の多くは、この弘前城並びに岩木地区の岩木山神社及び高照神社に集中しており、弘前藩ゆかりの建造物が多くなっています。

また、無形の民俗文化財の内訳は、城下町を中心に運行される弘前のねふたと岩木山神社を起点として行われている岩木山の登拝行事（通称「お山参詣」）となっています。

そのほかの分野の指定・選定文化財も、この弘前城跡並びに岩木地区の岩木山神社及び高照神社に集中し、残りが市内に散在する分布状況を示しています。

このほか、選択の記録保存の措置を講ずべき無形の民俗文化財が3件、登録有形文化財（建造物）が15件、国認定の重要美術品が1件あります。

##### ii) 国指定（選択・認定）以外の文化財の分布

本市には、国の指定等文化財のほかにも県指定文化財55件、市指定文化財142件の合計197件の指定文化財があります。このうち、美術工芸品などの分野を除外した、建造物、名勝地、遺跡、動物・植物・地質鉱物の分野に限って記述すると、県重宝建造物16件（16棟）、県指定名勝2件、県指定天然記念物6件、市指定建造物12件（11棟・1基）、市指定史跡2件、市指定天然記念物8件、国登録有形文化財建造物が15件（15棟）存在しています。これらのほとんどが、国指定文化財同様、弘前城跡周辺に集中しています。



○国重要文化財(建造物)

地図 対照番号	名称等	所在地
1	弘前八幡宮 本殿	八幡町一丁目
2	唐門	
3	熊野奥照神社本殿	田町四丁目
4	石場家住宅	亀甲町
5	革秀寺本堂	
6	津軽為信霊屋	藤代一丁目
7	誓願寺山門	新町
8	東照宮本殿	笹森町
9	弘前城天守	
10	二の丸辰巳櫓	
11	二の丸未申櫓	
12	二の丸丑寅櫓	
13	二の丸南門	下白銀町
14	二の丸東門	
15	三の丸追手門	
16	北の郭北門(亀甲門)	
17	三の丸東門	
18	旧第五十九銀行本店本館	元長町
19	長勝寺 三門	
20	御影堂	
21	本堂	西茂森一丁目
22	庫裏	
23	津軽家霊屋 5棟	
24	最勝院五重塔	銅屋町
25	旧弘前偕行社	御幸町
26	弘前学院外人宣教師館	稔町
27	岩木山神社 楼門	
28	拝殿	
29	本殿	百沢字寺沢
30	奥門	
31	端垣	
32	中門	
33	高照神社 本殿	
34	中門	
35	西軒廊	
36	東軒廊	高岡字神馬野
37	拝殿及び幣殿	
38	随神門	
39	廟所拝殿	
40	廟所門	
41	津軽信政公墓	

○県重宝建造物

地図 対照番号	名称等	所在地
1	旧伊東家住宅	若党町
2	旧岩田家住宅	若党町
3	日本基督教団弘前教会教会堂	元寺町
4	旧弘前市立図書館	下白銀町
5	旧東奥義塾外人教師館	下白銀町
6	熊野宮本殿	茜町一丁目
7	三尊仏及びその厨子堂	西茂森一丁目
8	久祥院殿位牌堂	西茂森二丁目
9	日本聖公会弘前昇天教会教会堂	山道町
10	旧青森県尋常中学校本館	新寺町
11	袋宮寺本堂	新寺町
12	報恩時本堂	新寺町
13	円明寺本堂	新寺町
14	本行寺護国堂	新寺町
15	巖鬼山神社本殿	十腰内字猿沢
16	岩木山神社社務所	百沢字寺沢

○市指定文化財(建造物)

地図 対照番号	名称等	所在地
1	石戸谷家住宅	浜の町東二丁目
2	揚亀園 揚亀庵	亀甲町
3	旧青森銀行津軽支店	百石町
4	黒門	西茂森一丁目
5	米燗堂	西茂森二丁目
6	旧小山内家住宅	清水富田
7	旧藤田家住宅(大宰治学生時代の下宿)	御幸町
8	乳井神社の五輪塔	乳井
9	乳井神社社殿(旧毘沙門堂)	乳井
10	藤原信政公霊所(瑞垣・木柵・山門)	高岡字神馬野
11	高照神社 文庫	高岡字神馬野
12	高照神社 神饌殿	高岡字神馬野
13	旧笹森家住宅 附門	若党町

○国登録有形文化財(建造物)

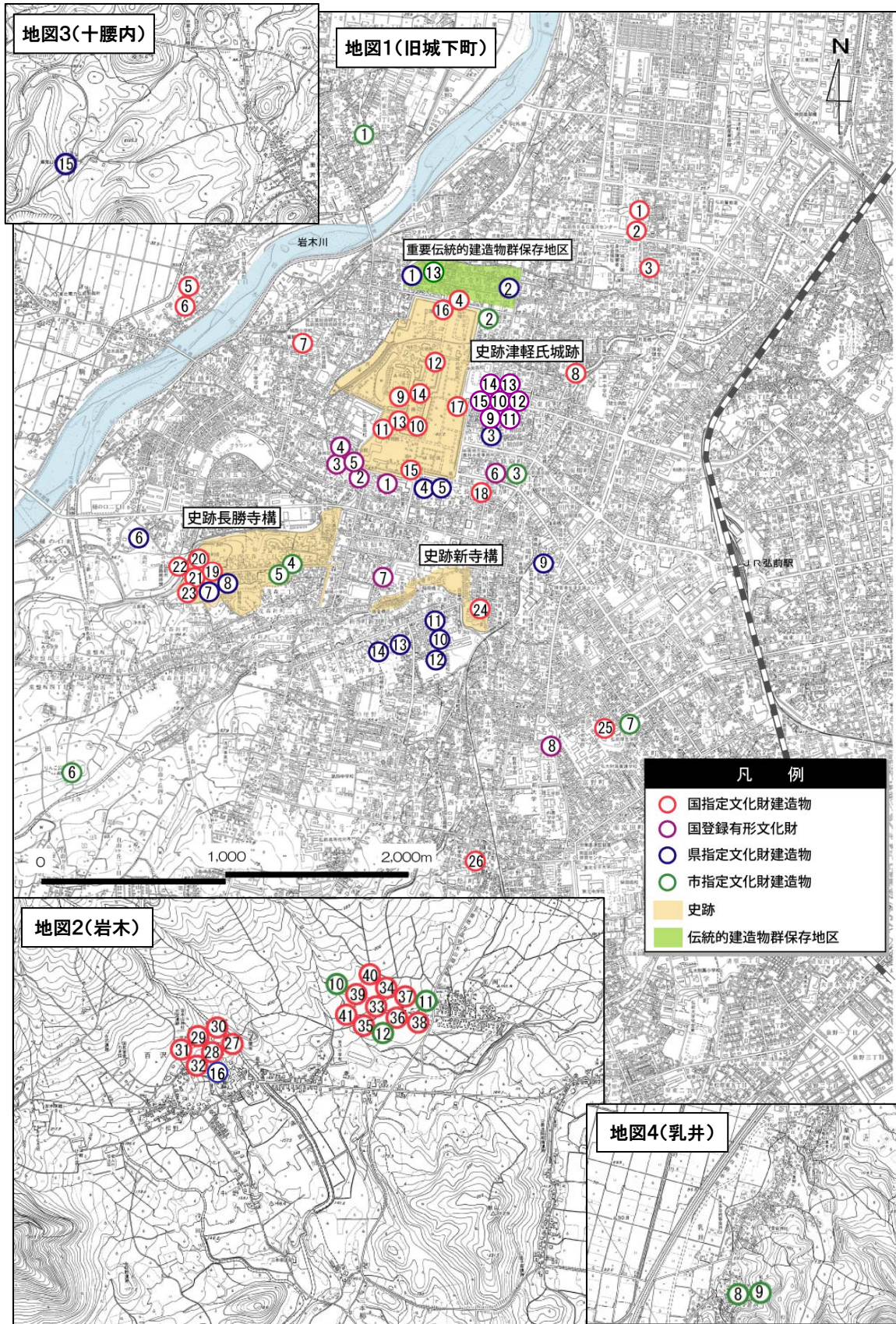
地図 対照番号	名称等	所在地
1	旧第八師団長官舎(弘前市長官舎)	上白銀町
2	旧藤田家別邸 洋館	
3	和館	
4	倉庫(考古館)	上白銀町
5	冠木門及び両袖番屋	
6	旧弘前無尽社屋(三上ビル)	元寺町
7	木村産業研究所	在府町
8	旧制弘前高等学校外国人教師館	文京町
9	石場旅館	元寺町
10	翠明荘(旧高谷家別邸) 洋館	
11	日本館	
12	奥座敷	元寺町
13	土蔵	
14	門	
15	四阿	

○配置図(次ページ)対照図





○文化財(建造物)分布図



## ② 文化財の特徴

- ・旧石器時代から現代まで人間が暮らし続けてきて、各時代ごとにいろいろな文化を築いてきたことを示す文化財が遺っています。
- ・縄文時代の遺跡が、岩木山麓や平野部周辺の丘陵を中心に数多く所在しています。
- ・郊外の丘陵地先端部や高台を中心に、中・近世の館跡が数多く遺っています。
- ・平野部を中心に弥生・奈良・平安・鎌倉時代以降の遺跡があり、板碑も多く遺っています。また、発掘調査例も増加し、次第に当時の様子が解明されてきています。
- ・津軽氏城跡(堀越城跡・弘前城跡)を始め、藩政時代の文化遺産が市街地を中心に数多く遺っています。
- ・明治・大正の近代建築も、城下町を中心として数多く遺っています。
- ・昭和の戦前の街並みが色濃く遺っています。

先史時代の遺跡が、岩木山麓や平野部周辺の丘陵を中心に数多く点在しています。

岩木山の北東麓に位置する大森勝山遺跡は、旧石器時代と縄文時代晩期を中心とする集落跡で、後期旧石器時代（約 15,000～12,000 年前）のナイフ形石器（平成 15 年(2003)に県重宝指定）や、縄文時代晩期（約 3,000～2,300 年前）の環状列石（ストーンサークル）、大竪穴住居跡が発見され、全国的に有名になりました。

砂沢遺跡は、弘前市北部の砂沢溜池南岸に位置する弥生時代前期を中心とする遺跡で、水田跡が発見され、東日本最古にして日本最北の水田跡として著名です。また、出土した土器は、縄文時代から弥生時代をつなぐ基準となる「砂沢式」土器として知られています。出土品や炭化米などは、平成 12 年国の重要文化財に指定されました。

先史時代の遺跡や出土品は、この地がかつて豊饒の地であったことを示しています。

古代から中世にかけては、近年多くの遺跡の発掘が行われ、文献史料の少ない当地域の古代から中世の社会を知る貴重な成果が生まれています。

古代の津軽は、奈良・京を中心とする中央政権に服さない蝦夷（えみし）の住む地域として、文献史料ではわずかに垣間見られる程度ですが、発掘では当時の集落跡が発見されており、土器や鉄製品など、中央政権支配下にある南の地域と比べても遜色のない遺物も出土しています。特に、平安時代以降は平野部を中心



に遺跡数が増加するとともに、岩木山麓で製鉄が始まるほか、北海道との関係をうかがわせる土器（擦文土器）や中国産の陶磁器が出土するなど、南北双方と広く交流関係があったことをうかがわせます。

また、当市の中世に関わるものとして、板碑が多く残っていることが挙げられますが、板碑は当時の人々の世界観・宗教観を知る上でも重要な史料です。また、長勝寺に残されている銅鐘（重要文化財）は、嘉元4年（1306）の紀年銘が切られており、銘文中には得宗北条貞時や、津軽に拠点を置く鎌倉武士たちの名前が認められ、当地が北条得宗領として鎌倉幕府と密接な関係にあったことを伺わせます。

藩政時代の文化財は、近世初頭に行われた城郭の建造と、寺社の城下町への移動・集中によって建造された寺院や社殿などが特徴として挙げられます。弘前城跡には、城郭建造当初からの北之郭北門（亀甲門）を始めとする門や櫓、そして文化年間に建造された天守など、藩政期に建設された文化財が残っています。

中でも、天守は、東北に残る唯一の現存天守として知られています。弘前藩は、帝政ロシアの南下に対応して蝦夷地警備に出動したことにより、文化5年（1808）に10万石へと家格が上昇しました。天守の造営はそれを契機に行われますが、北方世界と密接に関わる弘前の歴史的特徴を象徴する文化財であると考えられます。

蝦夷地警備は、農村の労働力を大量に動員し、諸経費の負担を村々に課すことで領民に大きな負担を強いるものでした。民衆の負担増には、文化7年（1811）の天守造営への動員も含まれていたと考えられ、弘前城跡の天守には、蝦夷地警備に伴う津軽地方の民衆への影響が集約されている観があります。弘前は北方社会との関わりから、本州最北に位置する藩都として、帝政ロシアの南下に対する最前線の役割を担い、それによって社会自体が大きな影響を受けたと考えられます。

近世初頭の城下への寺社の配置によって建設され、現在国の重要文化財に指定されているのは、長勝寺本堂・庫裏・三門、弘前八幡宮本殿・唐門、熊野奥照神社本殿、誓願寺山門、革秀寺本堂、津軽為信霊屋などがあります。城下建設当初に建造された南溜池のほとりの高台に寛文年間に築かれた最勝院五重塔は、藩政期以来の情緒を持つ弘前市の象徴になっています。

町割当初の様子がよく残っていることも弘前の特徴です。弘前城の北側に町割りされた武家町である仲町（重要伝統的建造物群保存地区）は、藩政期を通して商人・職人の居住したことのない、同一階層による専用住宅地でした。間口に比して奥行きが長い短冊形の地割は町割当初の様子をよく残し、通りを挟んで南入り、北入りで屋敷空間の構成が対照的になるなど、整然としたまち並みを形成しており、弘前城下の特色となっています。

4代藩主信政の時代には、数多くの人材が弘前に招聘され、産業・文化が発展しました。日本最古の養蚕技術書を著した野本道玄や、市指定文化財銅製獅子耳花入などを製作した鋳物師の渡辺近江、同じく市指定文化財日本刀国吉などを製作した刀鍛冶の来国吉、そのほか、絵師、金具師、具足師、大工、塗師、蒔絵師など、これらの人材が、弘前の文化の発展に果たした役割は大きいものがあります。

明治以降、青森に県庁が移動し、政治・経済の中心の座を譲った弘前としては、人材育成に活路を見出すしかありませんでした。新たな時代に見合う人材を養成する場所として機能した東奥義塾の存在は、外国人教師たちの影響で、キリスト教の伝播、それに伴う洋風建築の建造へと繋がっていきます。

第八師団の設置は、あらゆる面で弘前を生き返らせ、特に、高級軍人の婦人たちを中心に、東京で流行したものがすぐ弘前でも主流になるなど、ファッションや文化に敏感な文化都市としての弘前を生み、旧弘前偕行社には、当時の面影が色濃く残っています。

以上のように、弘前市の文化財の特徴は、本州最北に存在した人々の営みが、建造物や史跡に大きな影響を与えていると考えられ、弘前という街のたどってきた歴史の表われであると言えます。